

認めるような思いを抱くので、決して口に出さないのである。隣に恋する人がいながら、その人は人気者でクラスのみんなの憧れであるため、なかなか思いを伝えることができない。けれども、あきらめてしまおうとその恋は永遠に叶わないので、心の中で愛する人を想い続けるのだ。

(KKさん)

川一本隔てて隣接しているのだけれどもまったく違っている東京と千葉。二つの県の関係が、隣同士に座っている(?) 作者と憧れの相手の関係とパラレルになっている。作者は、自分と相手とはまるで違うのだと思いつつ、それでも好きでたまらないのである。注解を読むことで、この序詞にこめられた寓意がよくわかる。ユニークな名歌である。

### 五 次回にむけて——分析と反省

私自身が目標として掲げたのは、(1) 受講者が古典にいつそう親しんでくれること、(2) 受講者それぞれの日本語を耕すレッスンの一つを提供すること、であったが、授業を終えてみて、その目標は概ね果たせたのではないかと考えている。受講者からは、授業者への礼儀の側面があるにしても、自由に創作することは楽しかった、古典和歌のレトリックが面倒な約束事ではなく詩の方法の一つであることを実感することが出来た、古典の時代の人たちの感じ方を追体験することができた等の感想をもらったのであった。

しかしながら、大変に残念なことが一つある。これまで私は「古典和歌を創作する」試みを大学院生や現職の教員の方々、市民講座の方々と一緒に行なったことはあるのだが、高大連携講座の中に組み込んだのは初めてであり、高校生がどの程度の理解を示してくれるのか若干の不安があった。そのため講義の部分を多くし、各自が創作してくれた古典和歌は大学に持ち帰って、コメントを書き加えて高校側に返送するという方法を選んだ。出来上がった和歌はどれも大変に面白かったのである。創作した和歌を授業時間の中で披露し、互いに批評をしあったり、推敲をしたり、もっと多くの和歌を作ったりするという時間を設定すべきであった。

最後に——千葉東高のみなさん、ありがとうございました。今回は高校生のみなさんに話をしてもらう時間を、もっと多くとりたいたと思っています。

### 【注】

(1) 小学校・中学校の国語教科書における古典については、鈴木宏子「初めて出会う古典——小学校・中学校「国語」教科書をめぐって」(『日本文学』二〇一八年五月)においても考えたことがある。

(2) 現行の高等学校の国語教科書における和歌教材については、佐藤愛氏・高橋優美穂氏「高等学校「国語総合」における三大集の採択状況」(『日本大学大学院国文学専攻論集』二〇〇四年九月)が網羅的な調査を行っており有益である。

みました。

(MYさん)

文武両道をめざす進学校の生徒ならではの歌である。日々の忙しさを歌う序詞が恋心の表現へと予想外の転換を見せるところが面白い。序詞というレトリックの勘所もよく押さえられている。

【実例③】

○トレモロの重なる響きいつの日も尽きることなき恋もするかな

▽マンドリン楽部のトレモロが重なる音楽はずっと耳に残る(はず!)。「いつの日も」というのは私たちの最後の曲の歌詞。辛いこともあつたけれど忘れることができない、思い出すとキラキラしていて楽しかった笑顔の溢れる恋。ちなみに私はみんなのトレモロの重なるハーモニーに恋している!

(SYさん)

この歌には、作者自身の細やかな注解が施されており、マンドリンの美しい音色とともに、部活動に励んだ日々のきらきらした記憶もこめられた序詞であることがわかる。「いつの日も」は、部活動で演奏した最後の曲の歌詞にちなんでいるとのこと。そうした思い出を共有する仲間に贈ったなら、この歌の力はより大きなものとなるだろう。

【実例④】

○国語辞典のびっしりつまる文字数の尽きることなき恋もするかな

▽国語辞典のびっしりつまって文字のようにずっといちずに思い続ける恋もしていることだなあ。

(YHさん)

これもまた「なるほど」と納得されるよい序詞である。古典和歌において数の多いことの比喩とされるのは「海岸の砂」や「繁茂した夏草」などであるが、国語辞典の文字は、これらにまさるとも劣らないものであろう。「びっしりつまる」という、口語的な表現が、歌に生き生きとした力を与えているように感じられる。作者が日々真面目に勉強していることも伝わってくる。

これら②③④の三首は、いずれも恋が尽きることがないという同じ心情を詠じて

いるのだが、序詞(前半の物象)が異なることによって印象がまったく異なること、つまり和歌において心情表現と同じくらい物象が大切であることが知られよう。そして、どの序詞にも、高校生ならではの生き生きとした感性が感じられるのである。ここまで見てきた四首の歌は、「○○」の部分に掛詞的に働いて、物象から心情表現へとイメージが転換していくタイプであった。つづく⑤⑥⑦は、前半の物象が後半の心情表現の比喩になっている。

【実例⑤】

○学び舎のいまはあらざる桜の木落ち行くこころ恋もするかな

▽切られてしまった桜の木のように寂しさのある恋もしているのかなあ。

(MMさん)

桜が散ることは古典和歌の重要なテーマであるが、この歌の桜は切られてしまっているから、ますます寂しい。今はない桜は、転校してしまった恋人、あるいは卒業してしまった恋人の比喩であるようにも感じられる。

【実例⑥】

○ひさかたのスポットライトに照らされて奏でる音楽恋もするかな

▽来週にある定期演奏会であるスポットライトに照らされて、ステージから見る景色がすごくきれいでワクワクする気持ち。

(Uさん)

定期演奏会の壇上にいる高揚した気持ち、光に照らされたステージの光景が、恋をする気分の高揚感と結びつけられている。もしかしたら、恋しい人も会場にいて、スポットライトを浴びる作者の姿を見ているのかもしれない。「ひさかたの」という枕詞が、光の印象から「スポットライト」に転用されているのも面白い。

【実例⑦】

○東京と千葉はいつも隣り合えどまるで違う恋もするかな

▽東京と千葉は隣どうしだけれど、東京の方が人も多いし榮えていて、千葉県など眼中にない。千葉県民として東京はあこがれでありながら、それを言うとは負けを

「物」と「心」という二項対立を提示されると、現代の私たちは「心」の方が重要だと考えるかもしれない。しかし、序詞形式の和歌の場合、「物」と「心」は同じように大切であり、心情表現が同じであっても、物象を入れ替えることで、歌の印象はまったく異なるものとなる。このことを明示するために——そして授業の後半で生徒のみなさんに序詞を使った歌を詠んでもらうために——次のような歌を用意した。いずれも傍線部が「ながながし」を導き出す序詞にあたるのだが、極言すれば、この部分は「長いもの」ならば何でもよいのであり、詠み手の自由に委ねられているのである。

【教員が用意した序詞を用いた歌の例】

- ① 図書室で本読む君の三つ編みのながながし夜をひとりかも寝む
- ② 半島の海辺を走る内房線ながながし夜をひとりかも寝む
- ③ テナガザルやだなこつちを見ているよながながし夜をひとりかも寝む

①の場合、歌の中の「わたし」は、男子高校生である。部活動のさなかに、ふと図書室に視線を投げると、可愛い三つ編みのクラスメイトが本を読んでいる。「わたし」はこの子にほのかな好意を抱いているのだ。②の場合、「わたし」は内房線に乗って通学している。地図上の線路の長さ、電車に揺られる時間の長さが、ひとりぼっちの夜の長さに転換している。③は、いささか奇妙な歌であるが、大好きな人と動物園に出かけて、一緒にテナガザルなど見たのであろうか。テ「ナガ」ザル、「ながながし」という同音（類音）のくり返しによる序詞である。序詞は、その場にあるものから、さまざまに自由に創作することができる。そして、序詞がもたらすイメージによって、歌の全体の印象も大きく変わってくるのである。

四 序詞を用いた和歌を作ろう——高校生の創作から

前節で述べたような準備をした上で、いよいよ高校生に実際に古典和歌を創作してもらおう時間となった。課題としたのは、次のようなことである。

【課題】

「恋もするかな」という決まり文句を第五句に置いて、次のようなパターンの新し

い和歌を作りましょう。

〔序詞〕 ○○○ 〈恋もするかな〉

\* 〈序詞〉と、「恋もするかな」という心情表現をつなぐ「○○」の部分をもどのように創作するか、がポイントです。現代の私たちの身の回りにあるものから、自由に発想してみましょう。

\* たとえば、次のような歌が作れます。

「ひさかたのスカイツリーに日は暮れて月の空なる恋もするかな」

（訳）スカイツリーのかなたに夕日が沈んで、空には月が昇ってきた。そのように、心も上の空になる恋をしていることだなあ。

こうした課題を出し、各自に和歌を創作してもらい、さらに工夫した点などについて解説してもらうことにした。千葉東高の生徒のみなさんからは、さまざまな名歌が生まれた。以下、実例を紹介したい。○印を付したのが和歌、▽印は作者自身の記した解説である。

【実例①】

○太陽の輝く裏で隠る星昼間は見えぬ恋もするかな

▽昼間に星が太陽の光で見えないように、昼間は恋心をかくしているけれど、恋はしているのだなあ。例えばクラスメイトに好きな人がいるなどして。（TKさん）

「太陽の光に隠されて昼間は見えぬ星」という現代人ならではのイメージ（古典和歌に星はほとんど登場しないのである）に託して、密かな恋心を詠んだ歌である。クラスメイトとして、昼間はさりげなく一緒にいるけれど心の底では大好きなのだ、という若々しい気持ちもよく表現されている名作である。序詞の新鮮さ、序詞から心情表現への転換の仕方も見事である。

実例の②③④は、いずれも「尽きることなき恋もするかな」という歌である。

【実例②】

○東高課題に追われ日々テスト尽きることなき恋もするかな

▽東高は課題がいっぱいで、尽きることはないので、尽きることなき——に掛けて

固定した用法があるわけではなく、その歌に固有の一回的な表現である。序詞から下句への掛かり方には、掛詞型と同音（あるいは類音）くり返し型の二つのタイプがある。

例歌 あしひきの山鳥の尾のしだり尾のながながし夜をひとりかも寝む

（百人一首・3・柿本人麻呂）

### ③掛詞

定義Ⅱ 同音異義を利用して、一つの言葉（音）に複数の意味をもたせる修辭技法。掛けられる意味は通常二つで、一方は心情表現、一方は物象であるのが基本である。

例歌 山里は冬ぞさびしさまさりける人目も草もかれぬと思へば

（百人一首・28・源宗于）

花の色はうつりにけりないたづらに我が身世にふるながめせしまに

（百人一首・9・小野小町）

### ④縁語

定義Ⅱ 一首の趣旨とはまた別に、歌の中のある一語と密接に関係する語群をちりばめることによって、歌の表現に統一感をもたせる修辭技法のこと。掛詞や比喩などに伴って副次的に現われることが多い。

例歌 唐衣きつつなれにしつましあればはるばるきぬるたびをしぞ思ふ

（伊勢物語・九段）

### ⑤見立て

定義Ⅱ 視覚的な印象を中心とする知覚上の類似に基づいて、実在する事物Aを非実在の事物Bと見なす修辭技法。「恋する心」のような形のないものを「炎」にたとえろといった表現は、見立ての仲間には入らない。また見立てには「自然と自然の見立て」と「自然と人事の見立て」の二つのパターンがあり、後者は擬人法とも接続している。

例歌 み吉野の山辺にさける桜花雪かとのみぞあやまたれける

（古今集・春上・60・紀友則）

神奈備の三室の山を秋行けば錦たちきる心地こそすれ

（古今集・秋下・296・壬生忠岑）

これらのレトリックは、現代人から見るとひとしなみに「古いもの」であるが、和歌の歴史から見れば、①枕詞、②序詞は『万葉集』以来のもの、③以下は『古今集』において発達したものであり、新旧の差が認められることも補足説明をした。

話をすることで、特に注意を払ったのは、こうしたレトリックの背後にあるものについて生徒たち自身に考えてもらい、イメージをふくらませてもらうことである。

たとえば「枕詞」の場合。ある程度古典を勉強している高校生ならば、「ちはやぶる↓神」「ひさかたの↓空・光」「たらちねの↓母」「ぬばたまの↓夜」といった、基本的な枕詞と被枕についての知識は持っている。では、こうした表現はどうして行なわれるのか？「なぜ」という問いかけに答えることは難しいけれども、被枕となる言葉の性格から、一つの仮説を導くことができるであろう。枕詞が冠せられるのは、古代の人々にとって脅威的なもの、大切なもの、崇高なもの、である。枕詞とは、単なる飾りではなく、そのまま剥き出しにして口にすることが憚られるような存在に言及するときに、前触れとして登場する言葉なのではないか。大切なものや危険なものを、布で包んだり箱に梱包したりすると同様の心性が、枕詞の使用にも認められるのではないだろうか。

また「序詞」については、心情表現と物象の対応という問題に力点を置いて説明を試みた。『百人一首』の一首である「あしひきの山鳥の尾のしだり尾のながながし夜をひとりかも寝む」を例歌としたのだが、この歌は左のように図解することができる。

あしひきの山鳥の尾のしだり尾のながながし

ながながし夜をひとりかも寝む

前半の「あしひきの……ながながし」は、山鳥の垂れた尾が長いことを、後半の「ながながし夜を……」は、恋人に逢えずにひとりぼっちで過ごす夜が長く感じられることを歌っている。つまり前半は「物象」、後半は「心情表現」にあたるのだが、この二つは「ながながし」という言葉によって接続しており、視覚的な「長さ」から時間的な「長さ」へのイメージの転換がなされている。序詞といわれるのは、「ながながし」を導き出している物象の表現、右の図で傍線を施した「あしひきの山鳥の尾のしだり尾の」の部分である。

『源氏物語』などの教科書でも馴染み深い作品の中から、教科書とはまた別の印象的な場面を取り上げるのだが、古典和歌について話することもまた多い。今回の「基礎教養講座」では、「和歌の楽しみ方」と題して、和歌のレトリック全般について話をしたあと、生徒のみなさんに実際に古典和歌を作ってもらおう（詠んでもらおう）という計画を立てた。

このような計画を立てたことには、三つの理由がある。

まず一つの理由は、日本古典文学の根本にあるのは、和歌の「ことば」や和歌の中で培われた「ところ」であると考えること。平安時代の女流文学は言うまでもないが、『徒然草』のような中世の随筆にも和歌的な感受性が息づいているし、『平家物語』のような軍記物の中にも和歌的な情趣に満ちた場面が存在している。後世の俳諧の基底にあるのも和歌である。和歌は古典文学のエッセンスであり、和歌を視座とすることで見えてくるものは非常に大きいのである。

それにもかかわらず、現在の高校の古典においては、和歌の学習が十分に行なわれているとはいえないように思う——それが二つめの理由である。確認すれば、小学校の入門期における伝統的言語文化の学習の中では、俳句や短歌（和歌）といった短詩型文学は、大きな比重を占めている<sup>＊1</sup>。中学校においても、三年次に「万葉・古今・新古今」という単元が組まれているのは、国語科に関心を持つ人にとっては周知の事柄であろう。それらに比べると、高校の古典には詩歌の学習が不足しているのではないか。このことはおそらく、大学入試に詩歌が単独で出題されることは滅多にない（散文の中にも含まれる和歌は出題される）ことと密接に関わっているであろう。やむを得ないとも思うのだが、小学校・中学校からの積み重ねを考えると、いささかもったいないことである。せっかくの「基礎教養講座」であるから、少しでも穴埋めをしておきたい。

三つめの理由は、要所さえ押さえれば、古典和歌は現代の高校生にとっても十分に面白い教材になり得ると考えること。古典和歌には、枕詞・序詞・掛詞・縁語・見立てなど、近代以降の短歌にはほとんど用いられなくなる特有のレトリックがある。これらは、高校生には訳の分からない煩わしい約束事、棒暗記しなければならぬ厄介な物に見えているのではないか。そして、そのことが和歌を敬遠する気持ちを誘発しているのではないだろうか。しかし、これらのレトリックは、そもそもの成り立ちからアプローチすれば、高校生にも十分に納得がいくはずのものであり、

コツをつかんでしまえば、自分なりに「古典和歌」を詠んでみることも可能なのである。では、古典和歌を作ってみることに、いったいどういう学習効果があるのか？ 実際に和歌を詠んでみることは、高校生が古典に親しみ、各自の手持ちの日本語を耕していくための、有効なレッスンとなり得るであろう。そうしたことは、国語という教科の中の重要な要素たり得ると考えるのである。

### 三 古典和歌のレトリックを知ろう——講義の概要

今回私が担当した授業は、平成三十年年度「千葉東高校基礎教養講座」の第五回・第六回にあたる。開催日時は四月二十八日（土曜日）、九時から十時三十分と、十時四十分から十二時十分（計二コマ分）、開催場所は高校のセミナーハウスであった。参加してくれた生徒は七名で、内訳は三年生三人、二年生四人、先生お二人も同席してくださった。ゴールデンウィーク直前の、初夏を先取りしたようなすがすがしい晴天の日で、校門をくぐると、部活動に励む生徒のみなさんの元気な声が聞こえてきた。大学とはまた違った、光と活気にあふれる学び舎である。

まず講座の前半は、私の講義を主体とした。簡単な自己紹介のあと、あらかじめ用意したプリントを配布し、古典和歌のレトリック（枕詞・序詞・掛詞・縁語・見立て）について、『百人一首』や『古今和歌集』などのよく知られた歌を例に引きながら、話を進めた。プリントに記した事柄の一部を抜粋しておこう。

#### 【配布したプリントの抜粋】

##### ① 枕詞

定義Ⅱ 特定の語に冠せられる五音節以下からなる語。通常は語義未詳で、掛かる言葉は固定している。被枕（Ⅱ 枕詞が掛かる言葉のこと）となるのは、畏怖すべきもの、驚異的なもの、崇高なもの、大切なものであることから、超越的なものに対する古代の人々の信仰的な心情に由来する表現ではないかと考えられている。

例歌 ちはやぶる神代もきかず竜田川唐紅に水くくるとは

（百人一首・17・在原業平）

##### ② 序詞

定義Ⅱ ある言葉を導き出すために用いられる七音節以上の語句。枕詞のように

## 古典和歌を詠もう

### — 高大連携授業における実践とその分析 —

鈴木 宏子

千葉大学・教育学部

Let's compose Classical Waka  
— Practice in relation to the high school / university connection —

SUZUKI Hiroko

Faculty of Education, Chiba University, Japano

本レポートは、平成三十年度(二〇一八)四月に筆者が行なった、高大連携授業(千葉東高等学校基礎教養講座)の実践報告である。講義の内容は「和歌を楽しもう」というタイトルを掲げて、まず古典和歌を特徴づけているレトリックについて包括的な講義をしたのち、受講者自身に序詞を用いた和歌(短歌ではない)を創作してもらった。目標としたのは、(1)受講者に古典に親しんでもらうこと、(2)受講者自身の日本語を耕すレッスンの場を設けること、の二つである。受講者が創作した和歌を紹介しつつ、授業の全体を記録・分析し、後日の授業実践への手がかりとしたい。

キーワード……和歌(Waka)・国語(Language)・高等学校(High school)・大学(University)・創作(Composition)

#### 一 はじめに

千葉大学教育学部では、平成十七年度(二〇〇五)に千葉県教育委員会と交わした協定に基づいて、県内の三つの公立高等学校(県立千葉女子高等学校・同千葉東高等学校・同木更津高等学校)において、継続的に高大連携授業を実施している。全十五コマをワンセットとするオムニバス形式の授業で、前期の土曜日午前中の時間帯を利用して、大学の教員が先方の高校に出向き、受講を希望した高校生たちと一緒に講義を行なう。高校生にとっても単なるオプションではなく、すべての講座を無事終了すると、卒業単位の中に組み込まれる仕組みである。高大連携授業の試みは、まずは高校生の勉学や進路選択の一助となること(できれば教育学部への関心を高めてもらうこと)を目的とするものであるが、授業を担当する大学教員にとっ

ても、高校生の興味・関心・学力の実態をリアルタイムで知ると同時に、自分自身の研究や教育のあり方について振り返る絶好の機会となっている。

私自身も、この十年余りのあいだに、三校すべてにおいて複数回の授業を担当し、さまざまなことを学んできた。平成三十年度には、千葉東高等学校において二コマ分の授業を担当したので、その内容とそこから得た知見について、簡単ではあるが覚え書きを記しておくことにしたい。なお千葉東高校では、本連携授業を「基礎教養講座」と名づけているので、以下本稿においてもこの名称を用いることにする。

#### 二 古典和歌を取り上げる理由

私は古典文学を担当する教員で、出張授業に出かける際には、プリントを持参して、具体的な古文の一節を講読することになっている。多くの場合『枕草子』『伊勢物語』